

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：32640

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19H01657

研究課題名(和文) 幼児のアートの思考を伴うプロジェクト活動における学びの変容を可視化する実証的研究

研究課題名(英文) An Empirical Study to Visualize the Transformation of Learning in Project Activities Involving Artistic Thinking in Young Children

研究代表者

植村 朋弘 (Uemura, Tomohiro)

多摩美術大学・美術学部・教授

研究者番号：50328027

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,400,000円

研究成果の概要(和文)：保育における「アートの思考」を基盤にプロジェクトの学びの仕組みと意味の理論化を行い、プロジェクト活動を観察記録するソフトウェアの開発を行った。プロジェクト活動には保育者が子どもとの対話に聴き入ることと、素材の特性により創造的学びが生まれることを示した。その活動にはファンタジーと即興による語り・造形・劇遊び・見立てによる表現があり、そこに「なってみる」内側と外側の往復思考による表現にあることを明らかにした。ドキュメンテーションツールの開発では写真・動画・音声・テキストによる簡易記録と、過去の記録への効果的な検索により活動に対する視点と視野が広がることで、プロジェクトの学びを支えていくことを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

幼児教育の学びの質の向上に対して知的・探究的・創造的な学びのありようを研究する必要性から、プロジェクトの学びを取り上げ、アートの思考に着目し研究展開した。そこには聴き入る対話と様々な素材による表現、活動のドキュメンテーションによって展開していく仕組みと意味を捉えた。ここに人間の原初的な創造活動の源泉として捉えることで、本研究の学術的意義・社会的意義は、アートの思考を単にアート活動として限定せず、あらゆる物事への学びの活動と探究活動の根底にある思考と考える。芸術家・科学者・文学者など様々な専門家にとって、アートの思考が学際的学術研究として様々な分野の創造的探究活動への新しい問いとして提示する。

研究成果の概要(英文)：Based on "artistic thinking" in childcare, we theorized the structure and meaning of project learning and developed software to observe and record project activities. We showed that the project activities involve the caregivers listening to the dialogue with the children and that creative learning is generated by the characteristics of the materials. The project activities include fantasy and improvised storytelling, modeling, dramatic play, and visualization, and the expression of these activities is based on the reciprocal thinking between inside and outside, "becoming" the children. In the development of documentation tools, we showed that simple documentation using photos, video, audio, and text, and effective searches of past records, can expand perspectives and perspectives on the activities and support the learning of the project.

研究分野：デザイン学

キーワード：アートの思考 プロジェクトの学び ドキュメンテーション ペダゴジカル・リスニング 素材 ドキュメンテーション・ツール レジヨ・エミリア幼児教育 アトリエリスタ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

日本の幼児教育・保育現場における最優先課題は”質の向上”である。特に知的・探究的・創造的学びの促進が課題であり、この点でイタリア、レッジョ・エミリアにおけるアートの思考を伴う幼児のプロジェクト活動における学びに注目が高まっていた。現在もこの背景と状況下にあり、この問題を課題に継続的研究が必要とされている。

2. 研究の目的

本研究は、レッジョ・エミリアの教育思想の根源にあるアートの思考を基盤に、幼児教育・保育における最優先課題である質の向上（知的・探究的・創造的学びの促進）を目的とする。特にプロジェクトの実践活動の過程に着目し、具体的実践に結びつく幼児教育理論に発展させる変容的学びのあり方の創出を目指す。その実践の記録・分析・保存とそれらの可視化を可能にするツール（ソフトウェア）開発を行い、その実践的有効性を実際の教育活動をもとに実証していく。さらに「なぜアートの思考が新しい学びのカタチと質の向上をもたらすのか」その根拠を探究する。

- 1) アートの思考における幼児と素材との対話から生まれる変容的学びのしくみについて
- 2) モノ・コト、素材、表現の出会いと傾聴による変容的学びのしくみについて
- 3) 『プロジェクト』の展開を可視化するドキュメンテーション・ツールの開発について

3. 研究の方法

1) 保育実践と理論化

研究協力保育施設において展開されるプロジェクトに着目し、その活動の観察を行う。夏期・春期休暇期間を使って数日間に渡り研究者が参加し、保育者との協働による実態調査を行う。プロジェクト展開における表現活動に着目し、素材との対話によって生み出される学びの変容を捉える。その活動における子どもへの保育者の「聞き入る対話」を精査し、プロジェクト展開への関係性を捉える。このプロセスについて本研究グループで開発継続中のドキュメンテーションアプリ（EasySnap 及び EasySnapArchive / 以下 ES 及び ESA と記す）を使って活動記録を行ない、プロジェクト展開におけるドキュメンテーションの役割を捉える。

2) アプリ開発

ES 及び ESA について、プロジェクトを展開する保育者に使用を依頼し、ツールの評価をもとに開発を展開する。その実態やインタビューをもとにアプリの機能追加・改良案を展開し試作実装していく。またプロジェクト展開する保育者のインタビューからツールの使い方の変化とそれによって生成される意識の変化を考察し、プロジェクトの学びの仕組みを捉える。

3) 調査

国内のプロジェクトを実践する本研究協力者である保育園において参与調査を行い、実践活動の動画撮影による観察を行い、担当している保育者へのインタビュー調査を行う。

レッジョ・エミリア市の国際センターで開催される研修会に参加する。素材を基にしたワークショップへ参加し、ドキュメンテーションセンターではアーカイブ化されたデータの利用実態や管理方法について、またスタッフへのインタビューを行う。レッジョ・エミリア幼児教育の文献や DVD などの資料収集を行う。

4. 研究成果

研究開始1年目は、ほぼ計画に従って研究を進めることができたが、2年目の2020年4月以降コロナ禍のため、実地調査が不可能となり、研究計画を変更せざるを得なくなった。

研究の成果としては、以下の通りである

1) 変容的学びの仕組み（聞き入ることと素材による対話）

2019年度は、鳥取県のA保育園にて5歳児の「宇宙プロジェクト」について調査を行った。宇宙プロジェクトは、5歳児の子ども達は大きな紙にロケットを描くなど、広い宇宙について自分たちの知識をもとに、星や宇宙ゴミ・衛星などを描いていった。「なぜだろう？」と疑問を持ち、ファンタジーの世界を楽しむ子ども達の様子を見ながら、保育者は共に探求していった（写真1）。保育者は、子どもたちの心の中を共有し、共に楽しみ、探求のきっかけになる対話をしていく。子どもたちが感じた考えたことなどの感情を全身で表現するのを受け止め、対話を深めていく。子ども一人ひとりが表現を楽しみ、自分の世界を広げ深めていく。プロジェクトを実践するS男の3日間の制作活動において、保育者IがS男との対話の中で「聞き入ること、言葉かけと制作に必要な素材の投げかけ」についてビデオ撮影による観察を行なった。実践後には保育者Iへインタビューを行なった。



写真1. 紙粘土で表現された銀河系の作品

保育者は子どもの視点になって共感し、展開しそうな気配を感じ取り、次の制作イメージや発見へ広がりそうな言葉や素材をさりげなく投げかける。作品への問いかけは、タイミングや状況を配慮する。プロ

プロジェクトへの共有から以前の作品や対話との繋がりを心掛けていく。素材の投げかけは、その特性と環境を配慮し、作品に活かされることをイメージするが、作らせたイメージの提示ではなく、主体は子どもにあることが前提である。素材の特性は「言葉にはない多様な問いかけの効果と役割を持つ」。保育者の投げかけに対して、子どもの創作から思いもよらない作品が生まれ、見えるかたちとして立ち現れていくこと、そして作品には込められた言葉にできない魅力(場合によっては詩的言葉)に感動し、子どもと共に味わっていく。聴き入ることにより、子どもの言葉と素材から生まれる意味づけが、作品の中に現実と空想の世界に編み込まれていく。そこにアートの思考による新たな意味づけにより、問いと発見が創造され、次の活動に繋がっていく。そこに次の未知への新しい展開へと可能性を広げ、プロジェクトの学びの変容をもたらすきっかけとなる。

2) ドキュメンテーションをもとに振り返る

コロナ禍のため実施調査が不可能となり、当該保育園の4歳児のクラスで展開された「イノシシプロジェクト(2017)」をもとに、そのプロセスを記録したドキュメンテーションを取り上げ、実践した保育者と共にオンラインにて振り返りによる考察を行った(写真2)。



写真2: 4歳児によるイノシシの絵

2)-1 「即興とファンタジー」観点から

プロジェクトアプローチでは、日々の活動の中でその場限りの即興的なイノシシに関する表現・対話が行われる。子どもの遊びと学びには、「即興性」が本質にある。プロジェクトでは、日々子どもたちがイノシシの物語を語り、劇遊び等の中でファンタジーの世界を楽しんでいた。「ファンタジー」の中で、自分の「モノ」「コト」「ヒト」との出会いを、即興的表現によって自分にとっての「モノ」「コト」のとらえ方を作り上げていく。物語を語る時、その「モノ」になりきること、その視点から即興の中で確かめていく。「ファンタジー」でありながら「仮説」であり、その中に「問い」と「自分の考え」が含まれる。自己との対話により紡ぎ出されるファンタジーは、次に向けて更新していく世界を理解しようとするきっかけや手段となる。

またファンタジーは子ども同士の遊び中で、他者との対話・表現のやり取りの過程で、不確定要素が多いまま、飛び込み提案していき、それを他者が引き受けていくサイクルの中に、即興的な表現が生まれ創造される。ファンタジーには、他者との関わりによって自分を変容させる積極性・歓びが含まれている。「学び」「成長」を主体的な自己変容ととらえると、子どもが「遊びによって学ぶ」姿が、ファンタジーを生み出す過程に顕著に現れている。

2)-2 「美術教育」観点から「なってみる」ことの解釈

美術教育を象徴する「ABR(Arts Based Research):芸術的省察による研究」の観点から、当該保育園のドキュメンテーションを読み解いた。制作行為における探究は、対象の内側に入り込みつつ、外側から観察する営みにより成立する。それは擬人的認識論:「人は世界のものごとを理解するとき、自分の分身をありとあらゆるモノ・コト・ヒトの中に潜入させ、その体験の結果を「統合させたとき、人は「世界」を納得する」(佐伯 2013)に基づく「アートの思考」、すなわち「絵的に」考え「なってみて」考えることに通じる。「潜入してそれ自体になってみること、そこから再び距離をおいて引いた視点から統合的に見ることでものごとを理解する」(小松 2018)ことである。内側(ファンタジー)と外側(現実)を往復しつつ、ものごとの真実に迫ろうとする子どもたちの探究的志向や行為＝アートの思考が、描くこと、つくること、なってみることの連鎖が、ドキュメンテーションの至るところに読み取れる。また、このような子どもの持続的で探究的なあり方を支えるのは、思慮深い保育者の存在(問いかけ、つなぎ、熟考し、面白い)である。これらはドキュメンテーションによる出来事への思慮深い解釈と可視化によって支えられている。互いに対話・表現・思考を伝え触発し合い、子どもたちの中で進行・深化していく社会構成主義に基づく学習観の展開がプロジェクトアプローチの中に見出せる。

2)-3 アートの思考を支える「表現」の重なり

子ども達のプロジェクトの学びにおいて表現が媒介となり牽引するはたらきがあり、アートの思考が関わる。4つの表現「語り」「造形表現」「劇遊び」「見立て」に着目する。1)物事への興味関心から、言葉を媒介に他者との対話生まれ、自分の想像や思いを伝え他者の言葉を受け入れ連繋させ、各自の考えや問いが結びつき物語が生まれる。2)造形表現は、意味や物語が可視化されたものでありいくつかの素材で成り立つ。素材の組み合わせは、状況に従い多様な意味を作り出し、他者と協働制作により多様な関係性を生み出す。3)劇遊びは、物語を身体でなってみることで、その動きから即興的に発見と実感をもたらす。子ども達は配役の交代により物語を多視点で捉えていく。4)ごっこ遊びにおいて、即興的に思いつきや偶然性を伴って、側にある道具やモノを見立てることでストーリーに取り込んでいく(写真3)。見立てた道具やモノの特性からメタファーとして新たなストーリー展開につなげていく。ごっこ遊びは連続しながら変容し螺旋を描くように繰り返され物語が深まっていく。



写真3: ハンカチを猪の足跡に見立てたごっこ遊び

これらの表現が重なりにより可能性が開かれ現実とファンタジーを紡いでいく。そこには問いや探究心を、即興的に実験的に試すことで発見と創造を導き循環的に展開する。表現は、固定されるものでなく、次の活動に繋がる「生きたもの」である。変容しつつ物語が編み直されていく。子どもたちが出会う様々な「モノ」「コト」「ヒト」との関係性を表現によって「結びつけていくかたち」の中には、思いもよらない審美的・知的・創造的な意味を生み出す基盤とはたらきがある。そこに子どもたちが生きている世界を受容し創造していくはたらきが育まれ、子ども達一人ひとりの表現に伴って、主体的な関わりが生まれ、自分らしさへの自覚と他者と協働的關係性がつくられ互いに認め合った社会が形成されていく。

3) ツール開発

プロジェクトの展開を展開するにあたり、マインドマップ機能の充実を行なった。追加機能としては、「マインドマップ生成プロセスを時系列で表示する機能」を追加した。研究におけるツール開発の位置付けとして、ツールの機能の設定（機能構造）は、プロジェクトの学びを展開していくための「仮説的な筋道」として開発を行った。保育者がそのツールを使用していく道筋（操作構造）を精査すること、そして保育の学びへの視点や保育観への変容について調査を行うことからプロジェクトの学びの意味と仕組みについて明らかにする手がかりとなる。以下 ES 及び ESA の基本的機能とマインドマップ機能について説明する。

3)-1 Easy Snap 及び Easy Snap Archiver の機能

保育者自らが実践の最中に記録するための iPhone アプリ Easy Snap と、記録したデータを編集・保存するための Mac 上を実装するアプリ Easy Snap Archiver の開発を行った(写真 4,5)。このアプリは研究グループで以前より開発中のもので継続による開発となる。

3)-1-1 Easy Snap の機能

Easy Snap は、興味深い出来事その場で写真・動画・録音撮影及びテキスト入力を基本機能としており、実践の場で適正な方法で記録できる。その日の記録データはリスト表示され、カレンダーで管理され記録の流れが見れる。必要なデータを選択し PC (Mac) に転送する。



写真 4: Easy Snap



写真 5: Easy Snap Archiver

3)-1-2 Easy Snap Archiver の機能

Easy Snap から送信された記録データを保存・編集した機能が設定される。アーカイブ化（記録保存）と検索機能の充実によりデータベースを再編集・再利用し、活動を多面的に捉える。

a) データベースウインドウは Easy Snap から転送されたデータを管理する。データは、カレンダーで管理され、キーワード検索が可能である。検索により過去のデータをもとにドキュメンテーションの再編集ができる。

b) ドキュメント作成ウインドウは、データベースウインドウから選択された写真のレイアウト及び編集をおこなう。プリントアウト及び PC 上では録画・録音データが再生できる。

c) アーカイブウインドウではドキュメント作成されたデータを管理し、必要なキーワードの入力で必要なドキュメントを検索できる。

d) マインドマップウインドウでは、保育者はプロジェクトの中で、子ども達の活動から導き出された事柄をキーワードにマインドマップを作成していく。マインドマップウインドウは、キーワードから広がるプロセスを捉え、全体を俯瞰し流れを追いながら振り返り、次の方向性を示す手がかりとなり、プロジェクトをより効果的に展開していく。「新規カード」を表示しキーワードを入力する。プロジェクト展開に従ってカードを追加し、関連したカードのリンク付けてマインドマップを構成していく。作成開始から再生しプロセスを追っていける。展開を俯瞰してプロセスを捉え、各段階で広がった問い・意図・理由などの振り返りが可能となる。全体とそのプロセスの中のキーワードに戻ってディテールを閲覧することで新しい発見が導かれ次の展開を検討していく。

3)-2 Easy Snap 及び Easy Snap Archiver の評価

ES&ESA についての評価を以下に記す。

3)-2-1 ES 写真とテキスト入力機能について

写真撮影時に子どもの発話や逃したくないキーワードなどテキスト入力することで、ドキュメンテーション作成の際、簡易に多数の写真撮ることが可能になり、その中から重要な写真を簡易に選択することが可能になった。また数日後においてもテキストによる検索が可能になり、エピソードに関する前後関係の繋がりを捉え、意味を見出すことができるようになった。

3)-2-2 ES 録画について

ツールを使用始めた当初は写真記録を主としていたが「対話」を記録したいと考えるようになり、動画の使用頻度が高くなった。振り返る際、動画と写真にはそれぞれの効果があることに気づき、活動の内容により写真と動画を使い分けて記録するようになった。特に複数の子ども達の活動を記録するには、動画記録によって其々の子どもの姿を追っていくことで、活動を多視点

で捉えるようになった。写真と動画の選択により、保育を多様な見方ができるようになった。

3)-2-3 ES 録音について

録音での記録の場合、活動の側に iPhone を置いて記録できるので、その時の子どもの様子を集中できること、そして子ども達はカメラの視線を気にせず活動することができる。また再生時には聞き逃していた子どもの話を確認することで新たな発見があり、子ども達の活動のつながりが理解できる。音声を聞き取ることの特徴は、目の前の子どもに集中できたことで、音声によってその時の状況を想起しやすく、その子がその時に感じていた世界に入り込んでいきやすいように思える。

3)-2-4 ESA について

カレンダー機能によりその日の記録と以前作成したドキュメンテーションとの関係を追った振り返りが可能になり、プロジェクト活動の流れを掴める。またキーワード入力による検索機能によって過去のドキュメンテーションや各種記録データを特定できるため、学びのつながりと意味を考察することができるようになった。

3)-2-5 ESA マインドマップ機能について

以前の紙ベースによるドキュメンテーションは、時系列でファイルにまとめており、過去の必要な記録を探すには、ファイル内の記録全部を見返す必要があったが、検索機能により検索が簡易になり「活動と活動との関係性や繋がり」を捉えたり、「新しい活動が生まれたきっかけが何であったか」を簡易に見出すことで学びの意味など深く考察できるようになった。またこの関係をマインドマップによって、プロジェクト活動の時系列に展開するのではなく、様々な関係が時系列を超えて複雑に絡み合っていることを把握することができるようになり、プロジェクトの学びのかたちや仕組みを捉えられるようになった。

3)-2-6 ESA&eESA の使用によって生まれた保育観の変化

保育者へのインタビューから次のような保育観の変化が見られた。

保育者 M: 記録動画や写真のデータ整理が簡易になることで、子どもの学びが起こる前後関係を捉えられ、学びが生まれる過程を捉えることができるようになった。また動画を見直すことで、こんな姿や学びがあったのだという学びへの視野が広がり、新しい子どもの姿を感じるできるようになった。

保育者 S: 今まで自分の主観的な思い込みで学びを理解していたことに気づいた。また記録がスムーズになることで保育活動への視点を絞りやすくなり、別の視点で見えてみるできるようになった。さらに実践中での記録行為の中で、活動への視点を考え整理しながら記録できるようになった。

保育者 A: 以前の写真だけで記録していたときは、目の前の子どもの活動を捉えることで完結していたが、動画や写真などその都度適宜切り替えて記録することで、周りの子どものことから周りで起きているコトなど多層的に学びの関係性を捉えることができるようになった。

保育者 M: 以前の保育活動では、決められた活動を順に段階を追って線的に展開していくプロセスとして捉えていたが、ES&ESA を使うことで保育は時系列に従って進むだけでなく、戻ったり、何か繋がりによって新しいものが生まれたり、壊されたりすることで、線的に展開するものではない複雑な関係の中から学びが生成されることがわかった。保育そのものがもっと深く複雑で未知なものであり、順を追って決められた活動をもとに成長していくものではない、全然わからないものであることに気づいた。ES を使うことで、この手がかりになり、それを見つけるのが楽しみになった。つまり保育という学びの世界への興味関心と探究心への深まりを自覚できた。

保育者は、ツールを使いこなすことで、活動に対して適正な記録方法を簡易に選択ができるようになり、その記録方法が持つ観察可能な特性を使い分けられるようになる。これによって実践中に活動の中で起こる学びへの「視点」を移動できるようになり、ドキュメンテーション作成を想定し編集しながら観察記録が可能になる。また必要な過去の記録情報を検索できることで、現在の学びのシーンをその場での出来事にだけでなく、時系列の繋がりとして活動の流れを捉え、意味を発見し解釈を深めていく。さらには時間の流れだけに留めることなく、時間を超えた様々な繋がりや多様性があることリゾームの関係性を理解していく。またプロジェクトの学びのプロセスの可視化によって全体の流れを理解し現在の活動の位置付けの理解を俯瞰していく。

ツールの機能は、プロジェクトの学びの活動への「視点と視野」が広がることを支えていく。活動における学びの解釈が深まり広がること、プロジェクトの学びが変容するプロセスの把握とその都度の変容のきっかけとなる活動と意味を捉えられることで、変容していく面白さを自覚していく。それによって次の保育への仮説的に活動をデザインすることを試みながら、実践の中で仮説を超えた現象の多様性に引き込まれ、子ども達と共感しながら学びの活動を楽しんでいく。これによって保育という学びの世界への探究心が深まり、保育への実践者であり研究者として興味を深め広げていく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 郡司明子 | 4. 巻 vol.40 |
| 2. 論文標題 コロナ禍の色彩-食事の色から生活をみる- | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 色彩教育 | 6. 最初と最後の頁 18 - 19 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-------------------------|
| 1. 著者名 森真理・猪田裕子・須増啓之 | 4. 巻 第42号 |
| 2. 論文標題 大学キャンパスにおける「子育て支援ひろば『すくすく』」の役割の変容-アトリエ空間の構成から- | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 神戸親和女子大学児童教育学研究 | 6. 最初と最後の頁 217 - 235 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 森真理 | 4. 巻 第18巻 |
| 2. 論文標題 子どもの権利と乳幼児教育・保育実践の関係性-レッジョ・エミリア市の乳幼児教育から考える- | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 神戸親和女子大学大学院研究紀要 | 6. 最初と最後の頁 35-44 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 宮里暁美、平田オリザ、磯部錦司、奥井遼、出原大、中野圭祐、鮫島良一、伊藤史子、松山由美子、植村朋弘、片岡杏子 | 4. 巻 通巻第165号 |
| 2. 論文標題 子どもたちの「表現の中にある言葉」を感じる | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 発達 特集 子どもと表現 | 6. 最初と最後の頁 65-71 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|----------------------|
| 1. 著者名 森真理 | 4. 巻 第6号 |
| 2. 論文標題 コロナ禍におけるレッジョ・エミリア市の乳幼児教育が示唆することー参加・対話・連帯に着目してー | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 神戸親和女子大学国際教育研究センター紀要 | 6. 最初と最後の頁 1 - 10 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------|
| 1. 著者名 郡司明子 | 4. 巻 30巻 |
| 2. 論文標題 「SENSE-みがかずば?」 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 児童教育 | 6. 最初と最後の頁 5-8 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 郡司明子・狩野未来 | 4. 巻 第19号 |
| 2. 論文標題 「幼時期と小学校をつなぐ遊び/学びのー考察ー「アートの思考」に基づく算数の学習を通じてー」 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 群馬大学教科教育学研究 | 6. 最初と最後の頁 51-62 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 宮川沙織・郡司明子・石原加奈子・梶原千恵・狩野未来 | 4. 巻 第37号 |
| 2. 論文標題 「子どものアートの身体/思考を促す造形活動の考察ーBFAプロジェクトの実践を通じてー | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 群馬大学教育実践研究 | 6. 最初と最後の頁 131-140 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 郡司明子・栗原啓祥・他(編集委員会報告) | 4. 巻 第11巻 |
| 2. 論文標題 「アートが息づく子どもの生活ーアーティストと協同する園の実践を通じてー」 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 保育ナビ | 6. 最初と最後の頁 28-33 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 森真理、久保寺節子 | 4. 巻 第2号 |
| 2. 論文標題 レッジョ・エミリアの創造的リサイクリングセンター「REMIDA/レミダ」が私たちに語りかけていること ～素材との関係性を通して～ | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 鶴川女子短期大学国際こども教育研究センター紀要 | 6. 最初と最後の頁 p1 - 11 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|--------------------|
| 1. 著者名 名取和幸・郡司明子・赤木重文・大内啓子 | 4. 巻 Vol.37 |
| 2. 論文標題 座談会 色彩教育におけるデジタル表現を中心にPART3 絵本と色彩 絵本の色を楽しむ | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 色彩教育 | 6. 最初と最後の頁 6-13 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計22件(うち招待講演 1件/うち国際学会 5件)

| |
|---|
| 1. 発表者名 Mori, M., Gyobu, I., Kurihara, H. |
| 2. 発表標題 Challenge for going beyond art education in Japanese Early Childhood Education and Care. |
| 3. 学会等名 OMEF, 74th World Assembly and Conference (国際学会) |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Mori, M., Inoda, Y., Sumasu, H. |
| 2. 発表標題 Transformation of the role of “Suku Suku” the child-family support centre at university campus in Japan: Bringing the development of artistic community |
| 3. 学会等名 OMEP, 74th World Assembly and Conference (国際学会) |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Mori, M. , Uemura, T., Gunji, A., Tokuda, N. |
| 2. 発表標題 Transcending the border of fantasy and reality in play as the key for children as agency for living through uncertainty. |
| 3. 学会等名 EECERA 30th (国際学会) |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 植村朋弘、森真理、徳田憲生、郡司明子、指定討論者：津田純佳 |
| 2. 発表標題 子どものアートの思考から子ども観・保育観を問い直すーレッジョ・エミリアの乳幼児から保育の地平線の彼方へー |
| 3. 学会等名 第75回日本保育学会、自主シンポジウム |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Mori, M., Uemura, T., Gunji, A. |
| 2. 発表標題 The use of Pedagogical Documentation and Artistic Languages in Research with Young Children.” |
| 3. 学会等名 EECERA 29th (国際学会) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 植村朋弘、森真理、郡司明子、徳田憲生、磯部錦司 |
| 2. 発表標題 「生きるいとなみとしての子どものアートの思考を語り合う」 日本とレジャ・エミリアにおけるプロジェクトアプローチに着目して |
| 3. 学会等名 第74回日本保育学会、自主シンポジウム |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 植村朋弘、森真理、伊藤順子、福田泰雅、磯部錦司 |
| 2. 発表標題 「プロジェクトアプローチに見出される子どものアートの思考を語り合う」 レジャ・エミリアとの対話を通して |
| 3. 学会等名 日本保育学会、自主シンポ |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|----------------------------------|
| 1. 発表者名 郡司明子 |
| 2. 発表標題 「子どもたちのためのアート教育」 |
| 3. 学会等名 高崎市里見小学校PTAセミナー（招待講演） |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 郡司明子 |
| 2. 発表標題 教員養成学部におけるオンライン授業の課題と可能性ー図工科指導法の学習を通じてー |
| 3. 学会等名 図工美術会議 夏の学習会 オンライン |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|-----------------------------|
| 1. 発表者名 郡司明子 |
| 2. 発表標題 造形遊び勉強会 |
| 3. 学会等名 小学館集英社プロダクション研修会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 宮川沙織・梶原千恵・石原加奈子・郡司明子 |
| 2. 発表標題 子どものアートの身体/思考を促す造形活動の考察-BFAプロジェクトの実践を通じてー |
| 3. 学会等名 美術科教育学会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 郡司明子 |
| 2. 発表標題 「美術教育における『アートの身体』論を実装するパフォーマンスの実践/理論に向けて」 |
| 3. 学会等名 美術科教育学会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|-------------------------------------|
| 1. 発表者名 茂木一司・郡司明子・宮川沙織・廣瀬智央・中山晴奈 |
| 2. 発表標題 食×アートプロジェクトの過去・現在・未来 |
| 3. 学会等名 食×アートの学びが拓く持続可能な社会構築研究会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 郡司明子 |
| 2. 発表標題 教育養成学部におけるオンライン授業の課題と可能性ー図工科指導法の学習を通じてー |
| 3. 学会等名 図工美術会議 夏の学習会 オンライン |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 植村朋弘, 森真理, 井出孝太郎, 伊藤美帆, 刑部育子 |
| 2. 発表標題 ドキュメンテーションの本質を語り合うーレッジョ・エミリアと日本の実践の対話からー |
| 3. 学会等名 日本保育学会、自主シンポ |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 植村朋弘 |
| 2. 発表標題 経験の表現プロセスにおける幼児と保育者の対話に関する考察 |
| 3. 学会等名 日本デザイン学会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 梁一誠, 植村朋弘 |
| 2. 発表標題 会話型ユーザーインターフェースのためのデザイン方法に関する考察 |
| 3. 学会等名 日本デザイン学会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Biff, E., Zuccoli, F., Mori, M., Uemura, T., Gyobu, I., Sayeki, Gunji, A., Palaiolongou, I., Clark, A, & Carlsen, K. |
| 2. 発表標題 Children's voices in early childhood education: The use of artistic languages for pedagogical documentation |
| 3. 学会等名 EECERA (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 富金原光秀、森真理 |
| 2. 発表標題 土粘土による幼児の感性と創造力の育成～幼児期の保育・教育における芸術の意義～ |
| 3. 学会等名 OMEP |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---------------------------------------|
| 1. 発表者名 中村麻衣子、森真理 |
| 2. 発表標題 保育者養成における多文化共生理解教育のあり方を考える |
| 3. 学会等名 日本保育学会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--------------------------------|
| 1. 発表者名 郡司明子 |
| 2. 発表標題 さわってメモリーゲーム |
| 3. 学会等名 第6回お茶の水女子大学ライフ×アート展 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---------------------------|
| 1. 発表者名 町山太郎・郡司明子・平田智久 |
| 2. 発表標題 身体性と表現 |
| 3. 学会等名 幼児造形教育研究会 |
| 4. 発表年 2019年 |

〔図書〕 計7件

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 須永剛司・伏見清香編著・植村朋弘・小早川真衣子・池田拓司 | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 一般財団法人 放送大学教育振興会 | 5. 総ページ数 348 |
| 3. 書名 『情報デザイン特論』一般財団法人 放送大学教育振興会 「保育を支えるドキュメンテーション・ツールをデザインする」p.39-70 「ツールが子供の学びと保育の質を高める」p.72-87 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 森真理、猪田裕子 | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 北大路書房 | 5. 総ページ数 192 |
| 3. 書名 『子どもの権利との対話から学ぶ 保育内容総論』執筆担当「序章 保育内容総論への誘い」(1-5頁), 「第1章 生まれたときから子どもには権利があるー保育内容総論の基本」(9-21頁), 「第12章 保育内容の地平線 世界との対話」(152-164頁), 「終章 子どもの権利を保障する保育者・保育内容」(165-169頁) | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 編集委員会(代表:栗田真司) 共著者:市川寛也、内田裕子、小池研二、梶原良成、栗田真司、郡司明子、喜多村徹雄、林 耕史、齋江貴志、小口あや、片口直樹、高須賀昌志、武末裕子、博多哲也、平野千枝子、本 田悟郎、吉田奈穂子 | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 学術研究出版 | 5. 総ページ数 238 |
| 3. 書名 『美術教育の理論と実践 第2巻』執筆担当「中之条ピエンナーレにおける群大美術の取り組み」(41-64頁) | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 編著者：榊原洋一 共著者：上垣内伸子、河邊貴子、金ミンジ、周念麗、楠瑞稀子、服部美奈、松浦真理、星三和子、水野恵子、森真理 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 C R N (チャイルド・リサーチ・ネット) ベネッセ | 5. 総ページ数 45 |
| 3. 書名 『ひとめでわかる世界幼児教育・保育&各国・地域のE C E Cのマトリクス』 | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 編著者：荻原元昭 共著：イングリッド・エンゲダール(白石淑江訳)、一見真理子、日浦直美、松川由紀子、ジョン・シラジ・ブラッチフェルド(堀田正央訳)、森真理、パク・ウンヘ(パク・ジュヒョン訳) | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 北大路書房 | 5. 総ページ数 208 |
| 3. 書名 『世界のESDと乳幼児期からの参画 ファシリテーターとしての保育者の役割を探る』執筆担当：8章「アメリカにおけるE S Dへの取り組み」 | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 笠原広一、山本一也、平田智久、磯部錦司、森真理、伊藤裕子、吉川暢子、要真理、栗山誠、高橋敏之、鉄矢悦郎、真木千壽子、小室明久、東南さゆり、加山総子 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 東京学芸大学出版会 | 5. 総ページ数 222 |
| 3. 書名 アートがひらく保育と子ども理解ー多様な子どもの姿と表現の共有を目指して | |

| | |
|-----------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 清水陽子、森真理 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 建帛社 | 5. 総ページ数 120 |
| 3. 書名 共に育つ保育を探究する 保育内容総論 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|--|---|----|
| 研究分担者 | 郡司 明子 (Gunji Akiko) (00610651) | 群馬大学・共同教育学部・准教授 (12301) | |
| 研究分担者 | 森 真理 (Mori Mari) (20319007) | 神戸親和大学・発達教育学部・教授 (34514) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
| | |